



Title	中国語を母語とする日本語学習者の日本語学術共通漢字語彙の意味推測 : L2習熟度に着目して
Author(s)	呂, 倬菡
Citation	大阪大学言語文化学. 2026, 35, p. 17-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105217
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国語を母語とする日本語学習者の 日本語学術共通漢字語彙の意味推測

—L2 習熟度に着目して—*

呂 倬菡**

キーワード：日本語学術共通漢字語彙 (JCAKW)、意味推測、日本語習熟度

This study investigates the impact of Japanese language proficiency on the accuracy of lexical inferencing of Japanese Common Academic Kanji Words (JCAKW) among 59 Chinese learners of Japanese engaged in academic activities at universities and graduate schools across Japan. Two experimental conditions were employed: with and without contextual information. The findings revealed four main points. First, when contextual information was unavailable, lexical inferencing of JCAKW was difficult regardless of proficiency level, which can be attributed to the semantic opacity of the target words and the mismatch between the general meanings of the constituent characters and the overall word meaning. Second, when contextual information was available, learners across proficiency levels employed both word clues and context clues; however, across all target words, they consistently tended to rely primarily on word clues. Third, successful inferencing under contextual conditions depended greatly on how learners utilized the context; learners with higher proficiency generally made accurate inferences, although excessive reasoning or over-interpretation sometimes led to incorrect conclusions. Fourth, lower-proficiency learners experienced difficulties in understanding contextual meaning, which hindered their inferencing attempts. These findings suggest pedagogical implications for Japanese language education, highlighting the importance of not only teaching lexical knowledge but also fostering academic reading instruction that emphasizes the effective use of context at the sentence and discourse levels.

* Lexical Inferencing of Japanese Common Academic Kanji Words by Chinese Learners of Japanese: Focusing on L2 Proficiency (LV Zhuohan)

** 大阪大学大学院人文学研究科博士後期課程

1 はじめに

日本の大学・大学院における学術活動に従事する留学生は、大量の日本語学術語彙に直面する。その中でも、専門分野を問わず使用頻度が高い学術共通語彙は、学術テキストの読解、論文の執筆、研究計画書やレポートの作成、研究発表など、あらゆる学術活動において重要な役割を果たしている。特に、学術共通語彙のうち7割以上を占める漢字語彙（松下, 2018）は、論理的な思考活動や議論を支える語彙が多いため、学術活動を円滑に遂行する上で不可欠である。本研究はこれらの漢字語彙を「日本語学術共通漢字語彙」[Japanese Common Academic Kanji Words : 以下、JCAKW) とする。

中国語を母語とする日本語学習者（以下、CLJ）は、母語で豊富な漢字知識を持つため、日本語の漢字語彙の習得が容易であると一般的に考えられている。しかし、日中両言語に共通する漢字語彙であっても意味用法や品詞のズレにより、L2 習熟度が高い CLJ が母語の知識を基に誤った解釈をする危険性もある。また、中国語に存在しない漢字語彙（以下、脱落語）の処理では、意味使用の一般性¹や意味的透明性が低い場合、母語知識が十分に活用されず、意味推測可能性も低いことが報告されている（小森, 2019; 陳, 2009 など）。

これまでの L2 読解研究では、学習者が未知語に出会った際の意味推測過程が数多く検討されてきたが、既存研究の多くは一般的なテキストや語彙を対象としており、学術テキストや学術系語彙の意味推測に焦点を当てた研究は十分とはいえない。学術テキストとは、学術論文や専門書、研究報告などのように諸般の学術活動に関わる論理的かつ抽象的な情報を言語化し、学術系語彙が頻出する文章を指す。藤木他（2013）では、学術テキストを読み解くことは高等教育における学びに不可欠であるが、学習者の習熟度に応じた難易度の文章を読むことになるとは限らず、難解な文章の読解が求められると指摘されている。また、専門的文章の読解が困難となる原因の1つには用語が未知であることが挙げられている。とりわけ JCAKW は、専門分野を問わず幅広い学術テキストに頻出し、その字形の複雑性や意味用法の多様性、ならびに高い抽象性を有するため、日本語を母語（L1）とする大学生にとっても正確な理解や適切な運用が容易ではなく、大学・大学院における学びの深刻な停滞を招く可能性が指摘されている（田島他, 2022）。一方、谷内（2012）は、中級以上の日本語学習者には、辞書のみに頼ることなく文脈情報を活用して語彙の意味を推測する活動が重要となると指摘しており、一定の習熟度を有する学習者は読解活動において語彙の意味推測をしばしば行い、文脈が重要な手がかりとなることが示唆されている。しかし、学術テキストに特化して CLJ がどのように学術系漢字語彙を処理するか、L2 習熟度がどのように関わるかを実証的

¹ 1 語が持つ複数の意味のうち最も一般的に使われる意味である（藤山, 2011）。

に検討した研究は管見の限りでは見当たらない。

そこで、本研究では諸般の学術活動に従事する CLJ を対象に、文脈あり・なしの条件下で JCAKW の意味推測の正確さと日本語習熟度との関係を明らかにすることを目的とする。

2 先行研究と本研究の位置付け

第二言語習得に関する領域では、未知語の意味推測に影響を及ぼす要因として、文脈及び L2 習熟度がこれまで多くの先行研究 (Frantzen, 2003; Kondo-Brown, 2006; Mori & Nagy, 1999; 谷内・小森, 2009 など) で取り上げられ、盛んに議論されてきた。

未知語の意味推測では、文脈からの影響があるとされている (Kondo-Brown, 2006; Mori & Nagy, 1999 など) が、提供される文脈情報の質と量の差によって、文脈情報の利用が意味推測を促進できるか否かが異なる (Frantzen, 2003; 谷内・小森, 2009)。Frantzen (2003) は文脈手がかりの利用が意味推測を促進する場合としない場合があると指摘している。促進しない場合には、手がかりとなる文脈が未知語の意味を引き出す上で必要な情報を提供していないと示している。一般文章に比べて JCAKW が頻出する学術テキストは未知の JCAKW を取り巻く語彙的・文脈的環境が豊かであり、意味推測に際してより多くの多様な推測手がかりを提供し得ると考えられる。一方、L2 習熟度に関しては、これまでの L2 意味推測の実証研究 (Kondo-Brown, 2006; Mori & Nagy, 1999 など) により、意味推測には一定の L2 習熟度が必要であると指摘されている。習熟度が低い学習者は文章理解が難しく、語彙手がかりに依存した推測を行う傾向がある。一方、習熟度が高い学習者は文脈情報を得やすく、それを効果的に活用することで推測の成功率が高まると報告されている。

また、漢字語彙の意味推測に関する研究は、非漢字圏出身の日本語学習者を対象として数多く行われてきた (桑原, 2009; Mori & Nagy, 1999 など)。一方、CLJ を対象とした研究 (小森, 2019; 崔, 2015, 2019 など) は少数にとどまり、その中で L2 習熟度を要因として検討したものは管見の限り崔 (2015, 2019) のみである。崔 (2015) は CLJ を対象に、脱落語や日中同形語の意味推測における語彙手がかり、文脈手がかり、及び両者の統合の使用実態を多肢選択式テストで検討した。その結果、L2 習熟度と関係なく、語彙手がかりと文脈手がかりを組み合わせた統合手がかりの利用が最も多かった。一方、手がかりが2つあるにも関わらず CLJ が文脈情報を活用して意味理解を行う様子が窺えた。さらに、崔 (2019) は崔 (2015) を踏まえ、2名の日本語母語話者に依頼して作成した

2本の文章²を用い、発話思考法でCLJによる長文読解時の未知漢字語彙の意味推測過程を詳細に分析した。その結果、手がかり使用の多様性とL2習熟度との有意な関連はなかった。本研究は、崔（2015, 2019）との間に次の点で明確な差異と独自性を有する。第一に、崔（2015, 2019）の読解材料はいずれも研究目的に基づき作成された文章であった。このような読解材料は、使用語彙や文構成、難易度などを研究上の意図に沿って操作・統制できるという利点がある。しかし、崔（2019）がこれらの作例を「オーセンティック」な文章と位置付けている点には疑問が残る。これに対し、本研究では論文などの実際の学術テキストを用い、まさに「オーセンティック」な文章を読解材料とした。すなわち、真正性（authenticity）の観点からも従来の研究とは異なるアプローチを取っている。これにより、学術的読解活動を行う学習者が、現実の学術漢字語彙に遭遇した際の処理過程をより自然かつ再現的に捉えることが可能となった。第二に、対象語として「日本語学術共通漢字語彙」を扱い、崔（2015, 2019）で使用されている一般語彙とは異なり、専門分野を問わず学術テキストで頻出する学術語彙を中心に分析した。以上のように、本研究は先行研究を踏襲しつつも、分析対象において独自の貢献を試みるものである。

3 研究方法

3.1 調査対象語の選定

本研究では、まず『日本語学術共通語彙リスト Ver.1.01』（松下, 2011）から、以下の条件全てを満たす374語を抽出した。1) 二字漢字語、2) 旧日本語能力試験の2級以上、3) 四領域（人文・芸術領域、社会科学領域、自然科学（理学・工学系）領域、自然科学（生物・医学系）領域）全てで特徴度基準を満たす、4) 10のサブコーパス分野の全てに出現する、5) 一般名詞を除く。次に、『大辞林第四版』、『中日辞典第3版』、『現代漢語词典第7版』の記述を参照し、同形同義語211語を除外して163語を得た。そのうち、10分野100万語あたり総使用頻度（Fw）18.53以下かつ分散度68.80³以上の55語を選定した。最後に、55語から調査対象語を選定するため、日本の国立大学大学院に在籍するCLJ5名（全員N1以上）に予備調査を実施した。具体的には、各語を視覚呈示し、表1に示す3つの質問に順に回答させた。「5名の協力者全員が口述した意味（Q2）が全て正解かつ確信度（Q3）が100%である」という条件を満たさなかった語の中から調査対象語24語を抽出した（表2）。

² 900字程度の長文であり、トピックは「戦争」と「禿予防」である。

³ QUARTILE 関数で四分位数を算出し、10分野100万語あたり総使用頻度が第1四分位数（25%）以下、分散度が第3四分位数（75%）以上にした。

表 1 調査に使用した 3 つの質問

Q1: この語彙を学習したこと、あるいは見かけたことがありますか。		
1 ある	2 ない	3 わからない
Q2: この語彙について、思っている意味を全部教えてください。		
Q3: この語彙について、思っている意味はどの程度正確だと思いますか。相応しい選択肢を選んでください。		
1 確信している 100%	2 やや確信している 75%	3 どちらとも言えない 50%
4 やや不確信 25%	5 確信していない 0%	

表 2 調査対象語 24 語

突出、混迷、異質、特筆、台頭、急激、大別、考案、看過、別個、整合、前記、細分、比例、平行、過大、協調、横断、綿密、介在、開放、内包、発足、点検

3. 2 刺激文及び錯乱肢の作成

3. 2. 1 刺激文の作成

『アジア学術論文抜粋コーパス (ASPEC)』、『NINJAL-LWP for BCCWJ』、『J-STAGE』、『CiNii Research』を用いて刺激文を作成した。具体的には、各コーパスとデータベースで調査対象語を 1 語ずつ検索し、ヒットした日本語の学術テキストから当該語彙が含まれるテキスト (最大 300 字程度) を抜粋した。必要に応じてテキストを加工した。また、文章の難易度を確認するため『jReadability 日本語文章難易度判別システム』で難易度が中級以上に該当する文を選定した。1 語当たり 3 文を作成し、合計 72 文を作った。

3. 2. 2 錯乱肢の作成

1 語に対して 3 つの錯乱肢を作成する。表 3 に示された基準に基づき、『大辞林第四版』、『中日辞典第 3 版』、『現代汉语词典第 7 版』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『日本語教育語彙表』、『ラッコキーワード』を参照し、1 語当たり 3 つの錯乱肢を作成した。

表 3 錯乱肢の作成基準 (「協調」の場合)

刺激文	錯乱肢の作成基準	錯乱肢
集団行動では、集団の目的を達成するため人が () したり競合したりする。	対象語と類似した意味を持つが、統語的用法や使用方法が文脈に不適合	提携
	意味が文脈に不適合	独走
	対象語に対応する中国語 (日本語に存在しない)	協作

3.3 調査対象者

本調査では日本の大学・大学院に在籍し学術活動に従事するとともに、日本語能力試験（JLPT）N2以上の日本語力を有する中国語母語話者の留学生 60 名を調査対象者とした。

3.4 日本語習熟度

調査対象者の日本語習熟度は、TTBJ テストセット⁴（日本語力の総合スコア）を用いて測定した。平均得点及び標準偏差を表 4 に示す。分位数分割法を用いて上位 66% の得点（89）以上を上位群、上位 66% から下位 33% の得点（83.47）を中位群、下位 33% の得点（83.47）未満を下位群とした。また、3 群の得点差を対応のない 1 元配置分散分析で確認したところ、有意差があった（ $F_{(2,57)} = 69.73, p < .01, \eta^2 = 0.71$ ）。Tukey の HSD 検定による多重比較の結果、いずれの間にも有意差があった（共に $p < .05$ ）。

表 4 日本語力の総合スコアの平均得点及び標準偏差

	最大値	最小値	平均	標準偏差
全体 (N = 60)	97	53	84.03	9.43
上位群 (N = 22)	97	89	91.86	2.40
中位群 (N = 18)	88	84	86.33	1.08
下位群 (N = 20)	83	53	73.35	8.53

* 100 点満点

3.5 本調査の手続き

日本各地の様々な大学に在籍する大学生・大学院生を調査するために、調査は ZOOM または VooV Meeting を用いて一対一で行った。各大学の WeChat グループを通じて条件を満たす対象者を募集し、TTBJ テストセット及びフェイスシートの電子アンケートのリンク、ならびに同意書を配布した。協力者には実験の実施前後 1 週間以内に TTBJ テストセット及びフェイスシートを完成させるよう指示した。調査時期は 2024 年 10 月～12 月である。

実験実施時には、調査目的及び思考発話法の手順について協力者に説明し、思考発話法の練習を行った。協力者が手順を十分に理解したことを確認した後、実験を開始した。「文脈なし」実験（以下、実験 1）では文脈を提示せず思考発話法のみを用い、「文脈あり」実験（以下、実験 2）では文脈を提示し、多肢選択式の形で思考発話法を使用した。実

⁴ オンライン上で習熟度を測定できるテストであり、言語知識と言語運用の両面から習熟度を評価するものである（<https://ttbj.cegloc.tsukuba.ac.jp/pl.html#>）。

験1終了後に10分間の休憩を設け、その後に実験2を実施した。実験1では調査対象語の12語を使用し、実験2では残りの12語を使用した。なお、実験1の実施による練習効果や疲労効果などの順序効果が実験2の課題遂行に影響を及ぼす可能性があり、その影響を最小限に抑えるため、本研究では両実験で使用語彙を分け、実験間に休憩を設け、課題提示順序のカウンターバランスを考慮して実施した。

実験1では、表1に示すように、1枚のスライドに対象語1語及び3つの質問が書かれたパワーポイントの画面を提示し、質問の順番に頭の中で考えていることを発話するよう指示した。協力者が①学習したまたは見たことがある、②口述した意味が完全に正解である、③その確信度が100%であるという3つの条件を全て満たした対象語を「既知語」と判断し、「既知語」と判断されないケースは「未知語」と判断した。なお、口述した複数の意味の中に不正解のものがある場合、「未知語」と判定した。

表1 調査に使用した3つの質問（再掲）

Q1: この語彙を学習したこと、あるいは見かけたことがありますか。		
1 ある	2 ない	3 わからない
Q2: この語彙について、思っている意味を全部教えてください。		
Q3: この語彙について、思っている意味はどの程度正確だと思いますか。相応しい選択肢を選んでください。		
1 確信している 100%	2 やや確信している 75%	3 どちらとも言えない 50%
4 やや不確信 25%	5 確信していない 0%	

実験2では、表5に示すように1枚のスライドに刺激文1文及び4つの選択肢が書かれたパワーポイントの画面を提示した。協力者には刺激文を読んだ後、4つの選択肢から文中の空欄に最も適切な語を1つ選び、そう思う理由について発話するよう指示した。思考発話中に、協力者が発話を中断した場合や発話が不明瞭な場合には話を促したが、それ以外の介入は行わなかった。また、刺激文中の未知語に関する質問には調査者である筆者が回答するが、文章の内容理解や文法に関する質問には回答できないと協力者に伝えた。回答時間及び使用言語は特に制限しなかったが、ほぼ全員が中国語を用いて発話した。協力者に対して対象語が未知語であるかどうかを実験中に口頭で確認した。両実験は協力者の同意を得た上で録画・録音し、後日採点作業及び文字起こしを行った。

表5 「文脈あり」実験2の例（「協調」の場合）

集団行動では、集団の目的を達成するため人が（ ）したり競合したりする。			
1 協調	2 提携	3 独走	4 協作

3.6 採点方法

両実験それぞれの満点は12点である。実験1では、口述した意味が全て正しい場合は1点、一部に誤りがある場合は0.5点⁵、全て間違っている場合は0点とする。実験2では、正解の場合には1点、不正解の場合には0点とする。筆者と日本語教育学専攻のCLJ2名で実験1の全てのデータの採点を行った。3名の採点の一致率は86%であり、採点に不一致が見られた場合は、筆者を含む3名の判断のうち、2名の判断が一致したものを採用した。実験2は多肢選択式であったため、筆者1人で採点作業を行った。

4 結果

日本語習熟度がJCAKWの意味推測の正確さに影響を与えるかを検討するために、各実験別に1要因3水準の分散分析を行った。独立変数は日本語習熟度（上位群、中位群、下位群；被験者間要因）であり、従属変数は得点である。得点を集計する際、「既知語」と判断された語を除外し、残りの「未知語」に関する得点を12点満点との比率で換算した（未知語得点 ÷ (12 - 既知語数) × 12）。両実験のデータを正規分布に近づけるために対数変換を行い、平均値 ± 3SD の範囲外にある外れ値を各実験でそれぞれ1つ検出し、除外した。

「文脈なし」実験1では、日本語習熟度要因の効果が有意ではなかった（ $F_{(2,56)} = 1.25$, $n.s.$, $\eta^2 = 0.04$ ）。

表6 「文脈なし」実験1の平均得点と標準偏差

日本語習熟度要因 (N = 59)	平均 (5.15)	標準偏差
下位群 (N = 20)	4.65	2.53
中位群 (N = 18)	5.08	1.40
上位群 (N = 21)	5.72	2.24

⁵ 回答した複数の意味の中に、間違った意味または対象語に存在しない意味が含まれている場合は0.5点とする。

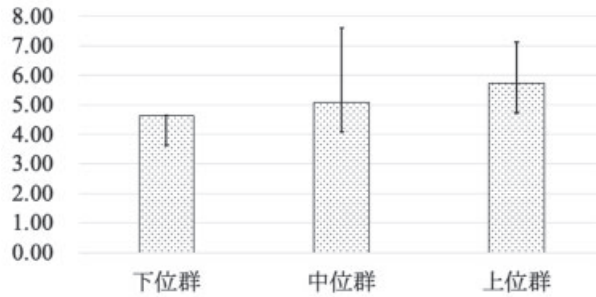


図1 「文脈なし」実験1の平均得点

「文脈あり」実験2では、日本語習熟度要因の効果が有意であった ($F_{(2,56)} = 3.61, p < .05, \eta^2 = 0.11$)。そこで、いずれの群間に差があるのかを確認するため、TukeyのHSD検定による多重比較を行った。その結果、上位群と中位群、中位群と下位群の間には有意な差が見られなかったが、上位群の得点は下位群より有意に高かった ($p = .029$)。

表7 「文脈あり」実験2の平均得点と標準偏差

日本語習熟度要因 (N = 59)	平均 (6.45)	標準偏差
下位群 (N = 19)	5.27	2.47
中位群 (N = 18)	6.75	2.00
上位群 (N = 22)	7.33	2.70

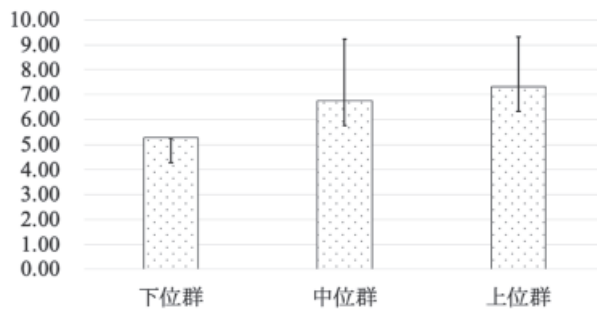


図2 「文脈あり」実験2の平均得点

また、意味推測における手がかり使用実態を調べるため、崔 (2015) による語彙手がかりと文脈手がかりの定義⁶を参照し、実験2では語彙手がかり、文脈手がかり、及び

⁶ 語彙手がかりとは、語彙にまつわるあらゆる情報（形態素情報、個々の漢字から得られる日本語の意味・中国語の意味）であり、文脈手がかりとは、語彙を取り巻く前後の文から得られる文法や意味に関する情報である（崔, 2015: 61-62）。

語彙手がかりと文脈手がかりを併用した統合手がかりという3種類の手がかりの使用頻度と割合を算出⁷した。その結果、L2習熟度の違いと関係なく、CLJは語彙手がかりのみを用いる割合が全体の6割以上を占めており、統合手がかりの使用が4割未満であった(表8)。一方、文脈手がかりのみ⁸の使用は確認されなかった。さらに、統合手がかりにおいて、語彙手がかりと文脈手がかりの使用詳細を見ると、図3に示すようにL2習熟度の高低を問わず、語彙手がかりの使用が文脈手がかりの使用を大きく上回っていた。

表8 語彙手がかりのみと統合手がかりの使用頻度と割合

手がかり 習熟度	語彙手がかりのみ	統合手がかり	合計(割合)
全体使用	272 (63%)	161 (37%)	433 (100%)
下位群	105 (64%)	59 (36%)	164 (100%)
中位群	69 (59%)	47 (41%)	116 (100%)
上位群	98 (64%)	55 (36%)	153 (100%)

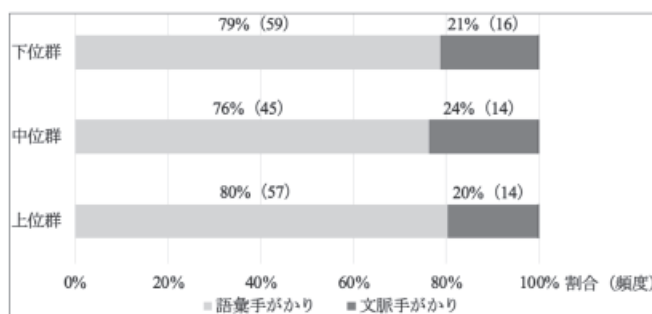


図3 統合手がかりの内訳(割合)

以上の結果を基に、JCAKWの意味推測における日本語習熟度の影響について考察する。

⁷ 1問では、語彙手がかりと文脈手がかりの使用回数の多寡に関わらず、両者が併用された場合は「統合手がかり」として1回の使用として計算し、併用がない場合は「語彙手がかりのみ」または「文脈手がかりのみ」として扱い、それぞれを1回の使用として集計した。

⁸ 語そのものの形態や意味を分析することなく、文の意味などの文脈情報を手がかりとして直接対象語の意味を推測する。

5 考察

5.1 「文脈なし」条件における意味推測の正確さと L2 習熟度

文脈なし条件においては、学習者の意味推測の正確さは習熟度の高低に関わらないことが示された。全体の平均得点 ($M = 5.15$) は満点の半分を下回っており、いずれの習熟度群においても意味推測の成功率は高いとはいえない。このことは、文脈情報が存在しない状況では、学習者の習熟度の高低に関わらず、JCAKW の意味を正確に推測することが困難であることを示唆する。以下の学習者の発話プロトコル (抜粋 1) から、推測の困難さの具体的な様相が推察される。

抜粋 1 文脈なし条件における【失敗例】(□ は対象語、斜体は日本語発話)⁹

〔看過〕: “kànguò”、中国語の「見たことがある」という意味ではないと思いますが、この二字の組み合わせから全く意味を推測できない。全く見当もつかない。

〔大別〕: 「別」は「分かれる」「分ける」「べつ (別)」という意味だと思いますが、「大」はどういう意味でしょうか。大きい別れ? 全体としては意味不明です。「大」の推測が難しいです。

〔特筆〕: これは「特別なペン」という意味だと思います。「特」は“特別 (tèbié)”、“とくべつ”の意味であり、「筆」は「字を書くペン」のことです。合わせて「特別なペン」になります。少し不自然な感じはありますが、贈り物としての特注ペンのような意味かもしれないと思います。

まず、「看過」に関する発話からは、構成漢字の意味を基盤として語全体の意味を推測することが困難であることが示された。学習者は両漢字の意味を語全体の意味と直結させることができないため、当該語は意味的不透明語¹⁰に分類されると考えられる。次に、「大別」に関する発話では、「大」の意味 (= 大きい) 及び「別」の意味 (= 分ける) が個別には正しく解釈されていたものの、「大」を語全体に組み込んで解釈すると「大きい」という意味が適切に機能せず、語全体の意味の構築ができなかった。このことは、構成漢字それぞれの意味が既知であっても、語構成上の意味の結び付きが不透明な場合には、語全体の意味推測を妨げる可能性を示唆している。

一方、「特筆」に関する発話では、学習者が構成漢字を L1 中国語及び L2 日本語の両言語から分析しつつ、連想によって解釈を試みる傾向が見られた。具体的には、「特」を中国語“特別 (tèbié)”や日本語「とくべつ」という仲介語と結びつけ、「筆」を「字を書くペン」と理解することで「特別なペン」という解釈を導いていた。しかし、この

⁹ 示された協力者の発話プロトコル例は、全て日本語に訳されたものである。

¹⁰ 本多 (2022: 15) は「二字漢語とその構成漢字の意味が 2 字とも結びつきにくい」場合、「不透明」に分類する。

解釈は「特筆」の本来の意味から逸脱しており、既有知識の活用が必ずしも正確な意味推測に結びつかないことを示している。『大辞林第四版』及び《現代汉语词典第7版》の記述を確認したところ、日中両言語の辞書における「筆」の中心義（辞書における1番目の記述を中心義とする）は「文字または絵をかく用具」である。このことから、学習者の解釈は意味使用の一般性に基づきつつも、当該語の語義と結びつきにくい場合には、語全体の意味を正確に構築するには至らないと考えられる。

以上を踏まえ、文脈が存在しない状況においては、①対象語の意味的不透明性、及び②構成漢字の意味使用の一般性と語全体意味との乖離、がJCAKWの意味推測を妨げる一因であると考えられる。

5.2「文脈あり」条件における意味推測の正確さとL2習熟度

文脈あり条件においては、日本語習熟度が意味推測の正確さに有意な影響を与えることが明らかとなった。具体的には、上位群と中位群、中位群と下位群の間には有意差は認められなかったものの、上位群は下位群よりも統計的に有意に高い得点を示した。このことから、文脈情報が存在する場合には、上位群¹¹程度の日本語習熟度を有する学習者は、JCAKWの意味推測において文脈情報を効果的に活用し、より正確な推測を行う可能性が高いと考えられる。

また、手がかりの使用傾向（表8、図3）について、崔（2015）は、L2習熟度の高低に関わらずCLJが2つの手がかりを統合して利用する傾向を示したと報告している。これに対し、本研究ではL2習熟度に関わらず語彙手がかりのみの使用が最も顕著であり、統合手がかりの使用はそれに比べて少なく、文脈手がかりのみの使用はなかったという点で先行研究とは異なる傾向が示された。さらに、統合手がかりの内訳を見ると、L2習熟度によらず語彙手がかりの使用が文脈手がかりを大きく上回っており、統合手がかりにおいても語彙手がかりへの依存が顕著であった。これらの結果は、手がかりが2つあるにもかかわらず、CLJが語彙手がかりを使わず文脈手がかりのみで意味理解を行う傾向があったとする崔（2015）の報告とは異なり、本研究では語彙手がかりを中心とした処理が示された。

この相違は、対象語の特性及び読解文章の性質の違いに起因すると考えられる。崔（2015）の実験文は一文から成る短文で、文法や構文が単純な平易な文脈であったため、CLJは文全体の理解が容易で、トップダウン処理により意味推測が可能であった。一方、崔（2019）では未知漢字語彙の意味推測においてCLJが文脈手がかりを語彙手がかり

¹¹ N1 相当。SPOT90 の得点の解釈を参照した（<https://ttbj.cegloc.tsukuba.ac.jp/p1.html>）。

より多く使用する傾向が報告されている。崔（2019）は文章レベルの作例を用い、文の長さや構造の複雑さは増したものの、対象語は依然として一般的な漢字語彙であった。これに対し、学術語彙が高度な抽象性や字形の複雑性を有する（松下, 2018; 田島ほか, 2022）ため、語彙知識のみでJCAKWの意味を推測することは容易ではなく、文脈手がかりの併用により推測負担を軽減できると考えられる。しかし、本研究で使用した学術テキストは、生の学術的文章であり、崔（2019）のような一般的な文章に比べて専門性が高く、論理構造が複雑で読解の難易度も高い。そのため、学習者が文脈情報のみを用いて語の意味を推測することは難しく、まず語から得られた情報を基に推測を行い、その後文脈手がかりで推測した意味を検証・補強するという段階的処理過程を経たケースが多いと考えられる。

一方、語彙手がかりのみに依存する傾向は、対象語の意味的透明性が高い場合と文章理解が完全に理解できない場合に顕著であった。意味的透明性が高い語では母語である中国語やL2である日本語のメンタル・レキシコン¹²が活性化しやすく、文脈を利用せずとも容易に推測できると考えられる。また、文章理解が困難な場合には文脈手がかりの利用に限られるため、学習者は語彙手がかりに依存せざるをえない。これらのことが、本研究では文脈手がかりのみでの意味推測が確認されなかったことを裏付けた。

以上より、JCAKWの意味推測においては、一般漢字語彙に比べ、語彙手がかりを中心に文脈手がかりを補助的に用いる傾向が強かった。なお、学習者が具体的にどのような両手がかりを活用して推測に至ったのかを、発話プロトコルから見ていく。

抜粋2 上位群の【成功例】（□ は刺激文及び対象語、【】 は日本語訳、斜体は日本語発話）

〔注入による止水に関連する要因は地盤条件、管路条件、施工（注入）条件 に大別されるが、試験条件としてこれら要因をさらに（ ）して設定した。－「細分」 全体の文脈をちゃんと読んでいました。まず要因があり、その後いくつかの条件に分かれています。さらに、逆接の「が」が現れ、後半の文には「さらに」 という言葉があり、試験条件をどのようにさらに詳しくするかという感じです。「細分」という言葉について、「細」は「細かい」/“细致 (xìzhì) 【細かい、詳細な】”であり、「分」は“分开 (fēnkāi) 【分ける】”/「分ける」という意味です。したがって、文脈を併せて総合的に考えると、試験の要因や条件をさらに詳しく整理したりするという意味で、「細分」が最も適切だと思います。

¹² 心内辞書とは、人間の頭の中に存在する語彙の知識体系である。

抜粋2において、学習者は文脈全体を精読し、文構造を論理的に分析した上で、逆接の「が」や情報付加を示す「さらに」といった接続詞の機能を十分理解しており、文全体の構造及び前後の論理関係を把握していた。このように、接続詞や文構造、論理展開といった多層の文脈手がかりを活用する様子が観察された。また、対象語「細分」については、学習者が「細」=「细致 (xìzhì) / 細かい・詳細な」、「分」=「分开 (fēnkāi) / 分ける」といった語彙手がかりを基に、語構成における個々の形態素を母語の中国語とL2の日本語の両言語知識を用いて詳細に分析し、その分析結果を文脈で検証した過程が見られた。このように、学習者は語彙手がかりと多様な文脈手がかりを統合的に活用しながら意味推測を行うことが見受けられた。このことから、習熟度が高い学習者は、JCAKWの未知語の意味を推測する際に、中国語の母語知識に加え、L2である日本語に関する語彙的・統語的知識も活用し、両言語の知識を併用しながら、語構成といった語彙手がかりと接続関係や文の論理構造といった文脈手がかりに同時に着目しつつ、両者を結合させた統合手がかりを有機的に使い、詳細な分析や複雑な推論が行えることが示唆された。これにより、未知語の意味を再構築する過程では、文脈手がかりと語彙手がかりを結びつけた統合手がかりの活用が意味推測の正確性の向上につながることが窺える。

一方、上位群では、語の意味や語に含まれる「中立的な印象」「冷たい感じ」のような感情的情報といった語彙手がかりに加え、文構造や文脈意味といった多様な文脈手がかりを併用した統合手がかりを活用し、詳細な分析や複雑な推論を行う傾向が見られたが、以下のように過度な推論・解釈が生じたこともあった。

抜粋 3 【失敗例】（□ は刺激文及び対象語、【】 は日本語訳、斜体は日本語発話）

「**上位群**」:「動物との触れ合いを目的とした動物（ ）療法が注目されている。-「介在」

目的は「動物との触れ合い」なので、「動物」が「主役」であるべきです。「中介(zhōngjiè)【仲介、媒介】」は手段という印象で目的ではないので、「動物との触れ合い」が目的ではなくなってしまい、「動物」が手段のように感じられてしまいます。「介在」が単に「動物がそこにいる」という中立的な印象で、この文のテーマには合いません。それに対して「共存」は、「動物と共に生きる」という前向きな意味があり、文全体の意図に合っていると思います。「介在」はやや冷たく感じられます。最初は「中介」を選ぼうとしましたが、繰り返し読むと目的はやはり「動物との触れ合い」なので、「動物」が中心になるべきだと考え、「共存」を選びました。

「**中位群**」:「インド製薬企業もアウトソーシングビジネスに参画し、製薬産業のグローバルなエコシステムのエージェントとして（ ）している。-「台頭」 「台頭」がその「エージェント」のイメージをよく表せると思いました。しかし、文章を何度も読み返すうちに、「台頭」も少し違うのではないかと思うようになりました。「台頭」はどちらかという悪い勢力が現れる時や政治的な文脈で用いられることが多いので、「企業」という語が用いられる文脈では、適切ではないように感じられました。一方、「得勢」の日本語でも“乘风破浪(chéngfēngpòlàng)【危険や困難を恐れず進む様子】”のような意味合いがあると思います。勢いよく発展し業界をリードするような優れた存在というイメージであるため、「得勢」にしました。

抜粋 3 の上位群の発話において学習者は文構造の理解に注目していたものの、「動物」という語から「動物と共に生きる」という前向きな意味を連想し、文の意図に合致すると判断し、「共存」を選んだ。このことから、学習者は文構造といった文脈手がかりよりも、「動物」の役割やそれに付随するイメージ・感情といった複数の語彙手がかりに依存したが、文脈全体の意味を客観的に十分に捉えず、主観的かつ過度な解釈に基づく推測を行い、文脈本来の意味から逸脱する傾向が見られた。また、下位群の学習者に比べ、中位群と上位群の学習者は文章を繰り返して精読する傾向も見られたが、その過程では初読時に正しく選択した語彙を誤った選択肢に修正することもあり、日本語に存在しない語（「得勢」）を中国語で解釈し、文の記述内容と関連づけることが見られた（抜粋 3 中位群の発話）。

以上より、習熟度の高い学習者は学術テキストを理解する際に、個人経験や背景知識に基づくトップダウン処理よりも、語や文構造などの下位情報を詳細に分析するボトムアップ処理（寺内, 2010）を重視する傾向が示唆された。このことは、崔（2015）が、文脈のみを用いた推測ではトップダウン処理が活性化した可能性を示唆した結果とは異なる。しかし、習熟度が高くても母語干渉や過度な推論・解釈により、学術テキストの内容を客観的に理解することは必ずしも容易ではなく、それが JCAKW における意味推

測の困難さの一因と考えられる。

抜粋 4 下位群の【失敗例】（[] は刺激文及び対象語）

「対象者を皮膚科医、主治医、看護師がそれぞれ（ ）に調査票に基づいて評価し一致度を調査した。－「別個」 3つの対象者をそれぞれ同じ調査票で評価しました。したがって、統一的に一致度調査を行うしかないと思います。「別個」は「もう一つの」という意味かもしれませんが、文中では意味が通じません。「同一」が一番相応しいです。

一方、下位群の平均得点 ($M = 5.27$) は全体平均を下回っており、意味推測が容易ではないことが窺える。抜粋 4 の発話では学習者は刺激文を「同じ調査票を用いた」と解釈し、「同一」が適切であると判断している。このように、学習者は文構造を的確に捉えておらず、文脈の意味を正確に理解していないことが示唆される。また、学習者は自身の解釈に基づいて「統一的に一致度調査を行うしかない」と述べており、文脈の意味を客観的に理解するのではなく、自らの主観的な理解を前提に文の意味を再構成する傾向が見られる。その結果、意味構築の過程において文脈本来の意味とは異なる方向へと解釈が導かれ、主観的な解釈に基づく推測に至っている。一方、推測した対象語の「別個」の意味を文脈と照らし合わせようとする傾向も見られたが、文脈理解が不十分であったため、文脈手がかりを適切に機能させることはできなかった。以上より、下位群の学習者は文構造や文脈の意味理解に困難を抱え、主観的な解釈に強く依存する傾向があり、文脈本来の意味から逸脱した推測に至ったことが考えられる。

以上の分析と考察から、JCAKW の意味推測では語彙手がかりが中心的である一方、「文脈」も重要な役割を果たしていることが明らかとなった。特に、文脈を正確に理解し、それを適切に活用できるか否かが推測の成否を左右する重要な要因であることが示唆される。このことから、文脈情報を効果的に利用するためには高度な日本語運用能力が不可欠であると考えられる。

6 結論と今後の課題

本研究では、JCAKW の未知語の意味推測の正確さに日本語習熟度要因が与える影響を、文脈のあり・なしの条件下で検討した。その結果、①文脈情報が利用できない場合には、習熟度に関わらず JCAKW の意味推測は困難であり、これは対象語の意味的不透明性や構成漢字の意味使用の一般性と語全体意味との乖離に起因していると考えられる。一方、②文脈情報がある場合には、習熟度に関わらず語彙手がかりと文脈手がかり

を併用するが、いずれの対象語においても語彙手がかりを中心的に使用する傾向が確認された。また、③「文脈」をいかに活用することが推測の成否を左右し、上位群程度の習熟度があれば比較的正確な推測が可能であることが示されたが、過度な推論や解釈によってかえって失敗する事例も見られた。④下位群では文脈の意味理解に困難を抱えており、それが意味推測を妨げることが明らかとなった。本研究は日本語教育現場における学術系の漢字語彙指導に対し、単語知識の教授にとどまらず文や談話レベルの理解を通じた文脈活用を重視した学術読解指導に有益な知見を提供し得ると考えられる。今後の課題として、学習者が実際の学術読解では具体的にどのような手がかりや読解ストラテジーを用いるのかを明らかにし、それが一般的な読解場面における推測過程とどのように異なるのかを検討する必要がある。

参考文献

- 桑原陽子（2009）「漢字未知語の意味推測に及ぼす語構成の影響－中上級非漢字系日本語学習者のケーススタディより－」『福井大学留学生センター紀要』4, pp. 21-30。
- 小森和子（2019）「日本語の学習経験がない中国語母語話者は和製漢語をどのように意味推測するのか」『明治大学国際日本学研究』11(1), pp. 101-121。
- 崔娉（2015）「日本語の未知漢字語彙の意味推測に見る中国語を母語とする学習者の推測手がかりの利用－漢字語彙の日中対応関係及びL2習熟度の観点から－」『言語文化と日本語教育』50, pp. 61-70。
- 崔娉（2019）「中国語を母語とする日本語学習者の未知漢字語彙の意味推測－漢字語彙の日中対応関係及び日本語習熟度の影響に着目して－」博士論文、お茶の水女子大学。
- 田島ますみ・松下達彦・佐藤尚子・橋本美香・笹尾洋介（2022）「日本語学術共通語彙の理解度の評価－大学生と小中学生の学年別比較－」『リメディアル教育研究』16(25), pp. 145-159。
- 谷内美智子（2012）「複合動詞の種類からみた日本語学習者の統語的複合動詞の意味推測の特徴－文脈量と習熟度の影響を中心に－」『言語文化と日本語教育』44, pp. 1-10。
- 谷内美智子・小森和子（2009）「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果－語彙的複合動詞を対象に－」『日本語教育』142, pp. 113-122。
- 陳毓敏（2009）「中国語母語学習者の日本語の漢字語習得研究のための新たな枠組みの提案－意味使用の一般性と意味推測可能性を考慮して－」『日本語科学』25, pp.

105-117。

- 寺内正典 (2010) 「認知科学的視点から見たリーディングー大学における望ましい「リーディングの習得と指導」の構築に向けてー」『経済志林』 77(3), pp. 515-544。
- 藤木大介・中村諭実子・山本和弘・山川真由 (2013) 「大学生の専門的文章の読解における未知語の意味の推測過程」『日本教育工学会論文誌』 37, pp. 5-8。
- 藤山智子 (2011) 「中国語を母語とする日本語学習者の漢語・漢字語習得研究の概観ー母語の影響、転移を中心としてー」『比較社会文化研究』 30, pp. 109-116。
- 本多由美子 (2022) 『二字漢語の透明性と日本語教育への応用』 くろしお出版。
- 松下達彦 (2018) 「日本語語彙習得に関わる普遍性と個別性ー漢字をめぐる問題を中心にー」『第四回学習者コーパス・ワークショップ & シンポジウムー第二言語習得における語彙の役割ー』, pp. 48-55。
- Frantzen, D. (2003). Factors affecting how second language Spanish students derive meaning from context. *The Modern Language Journal*, 87, 168-199.
- Kondo-Brown, K. (2006). How do English L1 learners of advanced Japanese infer unknown Kanji words in authentic texts. *Language Learning*, 56, 109-153.
- Mori, Y. & Nagy, W. E. (1999). Integration of information from context and word elements in interpreting novel kanji compounds. *Reading Research Quarterly*, 34, 80-101.

参考資料 (いずれも最終閲覧日：2024 年 8 月 30 日)

- 国立国語研究所 (2024) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (バージョン 2021.03, 中納言バージョン 2.7.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>
- 『CiNii Research』 <https://cir.nii.ac.jp>
- 小学館編 (2016) 『中日辞典第3版』 小学館。
- 『J-STAGE』 <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>
- 『jReadability 日本語文章難易度判別システム』 <https://jreadability.net/sys/ja>
- 『日本語教育語彙表』 <https://jreadability.net/jev/>
- 『NINJAL-LWP for BCCWJ』 <https://nlb.ninjal.ac.jp>
- 松下達彦 (2011) 『日本語学術共通語彙リスト Ver.1.01』
<http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/list.html>
- 松村明編 (2006) 『大辞林第四版』 三省堂。
- 『ラッコキーワード』 <https://rakkokeyword.com>
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室编 (2016) 《现代汉语词典第7版》 北京：商务印书馆。

- T. Nakazawa, M. Yaguchi, K. Uchimoto, M. Utiyama, E. Sumita, S. Kurohashi, and H. Isahara. (2016). ASPEC: Asian Scientific Paper Excerpt Corpus. In *Proc. of LREC*, 2204-2208.